

満月の夜に

明青

その日、アルフレッドは昼寝をしなかった。

三度の飯よりも昼寝が好きと言って憚らないアルフレッドである。いつでもどこでも、彼は必ず昼寝をする。魔獣と戦っている最中に昼寝の時間がやってくると、早く昼寝をする為に彼の力が2、3倍増しになるから、交戦は昼過ぎを選ぶべしというのは、もはや有名すぎる冗談だ。それが、今日は全く眠くもならない。

早朝に起きて鍛錬をする。明日に控えた冥王軍との決戦における作戦を確認する。

昼からは兵の装備の確認、物資の確認、自らの装備の整備。夕食。
そして。

「眠く、ならないんだよな……」

アルフレッドは、城の最上端、北の塔の物見台にいた。

自室にと割り当てられた部屋でベッドに寝転がってみたものの、どうにも眠気が訪れない。色々と試した対処法も効果が無くて、彼は仕方なく起き上がり、この北の塔へと何となくやってきたのだ。

——これでは、戦士として失格じゃないか。

戦士たるもの、どのような時も冷静でなければならぬのに。

眼下には見渡す限りの草原が広がっている。今日は満月が殊のほか綺麗だと、アルフレッドはぼんやりと思う。

しばらく景色を見ていると背後で微かな足音がして、アルフレッドはゆっくりと振り返った。

「アルフレッドさん、眠れませんか？」

そこに立っていたのは、暖かそうなローブを纏った一人の少女だった。

「サラ？」

その特徴的な水色の長い髪。水の厚い加護を受けた証。

サラは正解ですと笑って、軽やかな足取りでアルフレッドのいる物見台の方にやってきた。

「ちよつと失礼しても良いですか？」

アルフレッドが頷くと、サラは唐突にローブの懐から何かを取り出した。小さな瓶だ。

「それは、お酒？」

「そうです」

「まさか、今から飲むの？」

明日は冥王軍との決戦なのに？ と目を丸くしてアルフレッドが尋ねると、サラはさらに目を丸くして、まさか！ と左手をぶんぶんと振った。

「そんなことしませんよ！ これは、女神フレイアへの捧げ物です」

「捧げ物？」

「はい。これ、林檎酒なんです。そして実は、私のお手製です。今日は女神フレイアに祈ろうと思っこここに来たんです」

林檎は女神フレイアが好むとされる聖なる植物だ。そして、霸王を象徴する印の植物でもある。決して簡単に手に入る物ではない。

「へえ……」

そう言えば、自分は女神フレイアに導かれた身でありながら、女神に本格的な祈りを捧げたことは少ないとアルフレッドは今更ながらに思い返す。思い返して、少し自分が恥ずかしくなった。「僕も、一緒に祈っても良いかい？」

頬を掻きながらのアルフレッドの問いかけに、サラは喜んで、と笑った。

そこからは場に沈黙が降りた。二人して手を組んで跪き、女神フレイアに静かに祈りを捧げる。祈りを捧げるとき、時間の流れは無意味なものとなる。深く深く、ただ思考を今という一点のみに集約し、自己という大海に潜水するように、そしてその潜水を丸ごと女神に差し出すように。どれほど時間が経ったのだろうか。深い祈りが終わってアルフレッドが隣を見ると、サラはまだ深く俯いたままだった。そこからさらにしばらくして、ようやくサラは組んだ手を解いて顔を上げた。

「……君は」

アルフレッドが出した声は、沈黙の余韻で微かに裏返った。

「毎日、女神に祈りを捧げているの？」

「いいえ、残念ながら、そこまでは出来てないんです」

サラははにかみながら、小瓶を大事そうに懐にしまった。

「ただ、大きな戦いの前には、必ず女神フレイアに捧げ物をして祈りを捧げます。我が軍が災いを打ち碎きますように。我らの戦いが、人々が明日を生きる力になりますように、って」

ちよつと恥ずかしいですね、と頬に手を当てるサラに対して、その言葉は突然、ごくごく自然に、するりとアルフレッドの口から出た。

「……君は、強いな」

「え？ 強い？」

「うん、強い」

虚をつかれたように大きな目をぱちくりさせたサラに、アルフレッドは間髪入れず答えた。

「全然そんなことないですよ？ 自分の力で切り抜けるべきものを神に頼るなんて情けないって言われちゃったりしますよ？」

「そうなんだ。でも、君はそれでも強いと思うよ」アルフレッドは苦笑して、腕組みをした。

「女神を拠り所に行っているようで違う。きっと君は、自分が自分で立つたための方法がちゃんと分かっているんだ」

「アルフレッドさん？」

「僕は今日、昼寝をしなかったんだ」

アルフレッドにとつて昼寝がどれほど大切かを知らないサラは、その大きな目をぱちくりさせ

る。しかしアルフレッドは気にせず続けた。

「その理由がやっと分かった。僕はきつと……怖いんだ」

「怖い、ですか？」

「うん。もちろん、戦うのが怖いとか、死ぬのが怖いとか、そういうのじゃない。そんな覚悟なんてとっくに済んでるさ。ただ……」

アルフレッドはサラの方に体ごと向き直った。他人だけでなく自分自身にもひた隠していたそれを、今なら言っても良い気がした。

「僕はね、きつと、まだ僕自身を信じられていない。素晴らしい同志を率いるに足る器か、死んでいった仲間たちに胸を張れるような人間か。それが分からなくて、僕は怖い」

これまでに、沢山の戦いがあった。

轡を並べて魔獣と戦った重装騎兵がいた。アルフレッドに刺さりそうになった矢を代わりに受けて命を落とした槍使いがいた。沢山の仲間が彼と共に戦い、その命を散らしていった。

彼らが戦ったのがアルフレッドのためだなどとは微塵も思っていない。彼らは自分の信念のために生き、死んだのだ。自分が信じる平和と、人間の未来のためにその命を捧げるのだ。

ただその旗印として先頭に立つのは勇者アルフレッドであり、その信念を受け継ぐ義務がアルフレッドにはある。今になって彼らの心意を問うことは出来ない。死者はもう何も語らない。彼らはただ死者としてそこに在り、アルフレッドの後ろでその行いを見ている。

そして明日、きつとさらに多くの仲間の命が喪われる。アルフレッドの号令で喪われる。それほどまでに激しい戦いの予感がする。

「また、沢山の同志の死が積み重なるだろう。そんな彼らに対して、僕は、勇者として相応しいんだろうかって」

サラは顎に手を当てて、しばらくじっと考え込んでいた。その場に痛いほどの沈黙が降りる。やはり失望されたかとアルフレッドが思ったとき、サラはようやく顔を上げ、静かに口を開いた。

「勇者であるアルフレッドさんには、きつと私たちが想像もできないような苦しみがあるでしょう。でも、私にもこれだけは言える」

顔を上げたサラの瞳は、海のように深い色を湛えていた。

「その方たちは確かに、勇者というものに夢を見て、希望を託したかもしれません。でもきつとその方たちは、勇者がアルフレッドさんだからこそ、アルフレッドさんを信じるんだと思うんです」

「……」

「アルフレッドさんの戦う理由は何ですか？ 戦って叶えたい願いは何ですか？」

「……僕は」

アルフレッドは右手を胸に当てた。その質問への答えなら、最初から持っている。

「この混迷の時代を終わらせたい。人々が希望を持って、いつも笑っていられるようにしたい。それが、僕の戦う理由だ」

サラはにっこり笑った。

「きつと、その気持ちがあれば十分です。相応しいとか相応しくないとかじゃない。アルフレッドさんがアルフレッドさんとして戦う確固とした理由があるなら、きつとそれで十分です。過去ではなく、未来を夢見ましよう。みんなきつと、そんな貴方を信じてます」

「そう、かな」

「はい、そうです。私もですから」

胸を張って言うてから、あ、すみません、こんな偉そうな事を言っちゃって……とわたわたするサラを見て、アルフレッドも自然に笑顔になった。朝から冷えていた胸の底に暖かい灯りが燈った気がした。

「ううん、ありがとう、サラ。そう、きつとそれで、十分なんだね」

「……はい！」

そしてそれは、自然にアルフレッドの口から出た。

「サラ。君に、僕の背中を預けたい」

この少女になら、自分は安心して一番無防備なところを預けられる。その確信があった。

アルフレッドの静かな決意の声にサラは目を見開いた後、はい、預けられました、と花が咲くように笑った。

『それが、僕の戦う理由だ』

掌に乗せた水晶球に映し出される勇者アルフレッドの姿に、ヨミはにんまりと口元を歪めた。

ヨミがいるのは冥王軍の拠点の一つである、戦の最前線にあるクリスタルキャッスルだ。その城の中、自室にと割り当てられた部屋の石の窓枠に、ヨミはしどけなく寝そべっていた。

「ああ、そうともアルフレッド。お前は前に進むしかない。お前の足元には屍の山。斃れるその時まで、お前は死者の奴隷だ」

しかし、とヨミは、その幼さの残る顔を歪めた。

アルフレッドは類稀なる勇者だ。本人が気付いているにしろいないにしろ、女神の加護は最高のもの。もしアルフレッドが志半ばで斃れるようなことがあれば、フレイアはすぐさまその魂を回収しようとするに違いない。

だが。

「そんなことは、絶対にさせない。勇者アルフレッドの魂は私が裁く。彼の死後は、彼の全てが私のものだ」

愉悅に揺れる瞳の奥に静かな決意を秘めて、ヨミは呟いた。

ヨミは太古の昔から、死せる者全ての魂を裁き、断罪し、その行く末を見守ってきた。その幼い外見からは想像することすらできないような昔から。自らの意思とは関係無く。

それがほとんど初めて、こんなに執着する魂を見つけたのだ。

相手が女神だろうが知ったことか。魂を裁くのはこのヨミの役目だ。何者にも侵すことのできない、彼女だけの権利だ。

「ああ……待っている。待っているぞ、勇者アルフレッド。その勇気で不可能を覆せ。その決意で理不尽を薙ぎ払え。その類稀なる魂の輝きを、この私に示せ」

蜜のようにとろりと嗤って、ヨミは空へと手を伸ばした。

「さすれば、その先に。その先にこそ……」

果てしない大空に、幼い声は溶けて消える。

大きな満月が、静かに地上を照らしていた。